

核兵器禁止条約の発効から 9 条の地球平和憲章化への展望

—「平野文書」をヒントに考える—

日本反核法律家協会事務局長

弁護士 大久保賢一

1-1 核兵器禁止条約の発効から普遍化へ

核兵器の威力をよく知っている科学者たちは「終末」まで100秒だと警告している。それが杞憂で終わればいいけれど、核兵器がなくなるのと、人類が減びるのとどちらが先か判らないという人もいる。核兵器をなくさないと、いつ、知らないうちに、明日が来なくなるかもしれないのである。核兵器禁止条約の発効を契機として、更に、その普遍化を急がなくてはならない。

1-2 核兵器禁止条約の向こうにある課題

「核兵器のない世界」の実現だけではなく、戦争も戦力もなくそうとする人にとって、まだまだ目的地は遠い。9条を地球憲章にするなどということは「狂人の叫び」のように聞こえるかもしれない。「狂人の叫び」とは、幣原喜重郎氏（以下、敬称略）が自らを「狂人」にたとえたこと、半藤一利氏が「世界の各国が日本国憲法にならえ、と時々叫びたくなる」としていることにちなんでの造語である。

2 私の立場

私は「反核平和についての関心が高い一市民」と自覚している。核軍縮を研究する専門家ではないし、核軍縮の政策立案や実行にかかわる政治家でも行政官でもない。核兵器の使用禁止やその廃絶を希求する市井の人である。

3 「核兵器も戦争もない世界」は多くの人の希望

そもそも、日本国憲法は、戦争の放棄だけではなく一切の戦力も放棄するとしているのだから、その憲法規範どおりに国政が運営されていれば、こんな危険な膠着状態など発生していなかったはずである。もちろん、憲法の規範力が機能していたので、この75年、日本軍は、直接的には殺傷や破壊はしていないし、その死亡もない。けれども、政府や与党にとって憲法は、すり抜ける対象になってしまっているのである。立憲主義は王様がいた時代の思想だといった首相もいる。どうしてこうなってしまったのだろうか。75年前にさかのぼって少しだけ考えてみよう。

4-1 「平野文書」の幣原喜重郎

「平野文書」は、幣原の側近であった平野三郎氏が、憲法施行4年後の1951年に幣原本人から聞き取ったことの記録だから、国会答弁などとは違う幣原の息遣いが聞こえてくる。

幣原の発言は多岐にわたっているが、ここでは次の三項目について検討してみる。第一は、自衛のための軍事力は不要なのかという論点である。そもそも、丸腰の国家などありえるのかという問題である。一切の戦力の放棄は非現実的かということでもある。第二は、核兵器は危険なものであるがゆえに、逆に世界大戦を抑制、抑止するのではないかとの論点である。核兵器は「秩序の兵器」と評価できるのかである。第三は、幣原はアメリカとどのような関係を結ぼうとしていたかである。マッカーサーの思惑に対する幣原の考えが参考になる。

これらの論点は、いずれも、当時も現在も、多くの人々が関心を寄せている問題であるし、簡単な問題でもない。しかし、「狂人の叫び」に共感する人にとっては避けられない論点である。

4-2 軍隊のない丸裸のところへ敵が攻めてきたらどうする

平野の幣原に対する正面からの問いかけである。

幣原の答は「それは死中に活だよ。一口に言えばそういうことになる」である。

幣原の答の大前提は、戦争と軍事力の放棄である。「たしかに今までの常識ではこれはおかしいことだ。しかし原子爆弾というものが出来た以上、世界の事情は根本的に変わって終わったと僕は思う。何故ならこの兵器は今後更に幾十倍幾百倍と進化する。次の戦争は交戦国の都市がごとく灰燼に帰すだろう。そうなれば各国は戦争をやめることを考えなければならぬ。戦争をやめるには武器を持たぬことが一番の保証だ」というのである。

4-3 非武装宣言ということは、従来の観念からすれば全く狂気の沙汰である。だが今では正気の沙汰とは何かということである。武装宣言が正気の沙汰か。それこそ狂気の沙汰だという結論は、考えに考え抜いた結果もう出ている。要するに世界は今一人の狂人を必要としているということである。何人かが自ら買って出て狂人とならない限り、世界は軍拡競争の蟻地獄から抜け出すことができないのである。これは素晴らしい狂人である。世界史の扉を開く狂人である。

4-4 世界平和を可能にする姿は、何らかの国際的機関がやがて世界同盟とでもいうべきものに発展し、その同盟が国際的に統一された武力を所有して世界警察としての行為を行う外はない。このことは理論的には昔から分かっていたことであるが、今まではやれなかった。しかし原子爆弾というものが出現した以上、いよいよこの理論を現実に移す秋がきたと僕は信じた訳だ。

4-5 僕は第九条によって日本民族は依然として神の民族だと思う。何故なら武力は神でなくなったからである。神でないばかりか、原子爆弾という武力は悪魔である。日本人はその悪魔を投げ捨てることによって再び神の民族になるのだ。すなわち日本はこの神の声を世界に宣言するのだ。それが歴史の大道である。

4-6 原子爆弾が登場した以上、次の戦争が何を意味するか、各国とも分るから、軍縮交渉は行われるだろう。だが交渉の行われている合間にも各国はその兵器の増強に狂奔するだろう。むしろ軍縮交渉は合法的スパイ活動の場面として利用される程である。不信と猜疑がなくなる限り、それは止むを得ないことであって、連鎖反応は連鎖反応を生み、原子爆弾は世界中に拡がり、終りには大変なことになり、遂には身動きもできないような瀬戸際に追いつめられるだろう。

4-7 それが軍拡競争の果ての姿であろう。要するに軍縮は不可能である。絶望とはこのことであろう。唯もし軍縮を可能にする方法があるとなれば一つだけ道がある。それは世界が一斉に一切の軍備を廃止することである。

一、二、三の掛声もろとも凡ての国が兵器を海に投ずるならば、忽ち軍縮は完成するだろう。勿論不可能である。それが不可能なら不可能なのだ。ここまで考えを進めてきた時に、第九条というものが思い浮かんだのである。そうだ。もし誰かが自発的に武器を捨てるとしたら一。最初それは脳裏をかすめたようなものだった。次の瞬間、直ぐ僕は思い直した。自分は何を考えようとしているのだ。相手はピistolをもっている。その前に裸のからだをさらそうと言う。何と言う馬鹿げたことだ。恐ろしいことだ。自分はどうかしたのではないか。若しこんなことを人前で言ったら、幣原は気が狂ったと言われるだろう。正に狂気の沙汰である。

5 核兵器は戦争を抑制するか

ところで、幣原はこんなことも言っている。

恐らく世界にはもう大戦争はあるまい。勿論、戦争の危険は今後むしろ増大すると思われるが、原子爆弾という異常に発達した武器が、戦争そのものを抑制するからである。第二次大戦は人類が全滅を避けて戦うことのできた最後の機会になると僕は思う。如何に各国がその権利の発展を理想として叫び合ったところで第三次世界大戦が相互の破滅を意味するならば、いかなる理想主義も人類の生存には優先しないことを各国とも理解するからである。

6 元帥は簡単に承知されたのですか

平野のこの質問は重要である。連合国最高司令官マッカーサー元帥の同意がなければ、何事も進まない時代だったからである。幣原かどのような理想を持とうが「元帥の承知」なしでは事態は一步も進まないのである。九条の発案者は幣原だと私も思っている。けれども、マッカーサーがそれに同意しなければ、日本国憲法九条が誕生しなかったであろう。「押し付け憲法」などとは思わないけれど、占領軍がその成立に大きくかかわっていたことを否定することはできない。平野がこの質問をするのは当然である。

この質問に対する幣原の答えはこうである。

マッカーサーは非常に困った立場にいたが、僕の案は元帥の立場を打開するものであるから、渡りに船というか、話ほうまくいった。しかし、第九条の規定には彼も驚いていたようだ。

元帥が躊躇した大きな理由は、アメリカの戦略に対する将来の考慮と、共産主義に対する影響の二点であった。それについて僕は言った。日米親善は必ずしも軍事一体化ではない。日本がアメリカの尖兵となることが果たしてアメリカのためなのであろうか。原子爆弾はやがて他国にも波及するだろう。次の戦争は想像に絶する。世界は亡びるかもしれない。世界が滅びればアメリカも滅びる。問題はアメリカでも、ロシアでも日本でもない。問題は世界である。

7 9条の命運

幣原とマッカーサーの傑作である9条は、まだヨチヨチ歩きであった頃から大きな試練にさらされることになる。1949年、ソ連の原爆保有と中華人民共和国の成立である。それに加えて、朝鮮戦争の勃発である。マッカーサーは国連軍の最高司令官として北朝鮮と中国に対峙する

ことになる。彼は、その戦線で原爆の使用を計画する。「30発から50発の原爆を満州の頸状部に投下すれば、10日以内に勝利できる」、そうすれば「少なくとも60年間は北から朝鮮を侵攻する余地がなくなる」という発想である。「北からの侵攻」阻止とはソ連と樹立されたばかりの中華人民共和国の脅威との対抗を意味している。他方、日本に対して、警察予備隊の発足を指令している。憲法9条の骨抜きが始まりである。

8 そして、現在

自民党は1955年の結党以来、憲法9条を目の敵にしている。その理由は、「押し付け憲法」などもいうけれど、非軍事の平和など空想的で無責任だということ。国家の独立と安全なくして国民の生命、自由、財産を守ることはできない。そのためには戦力は必要だし、それだけでは不安なので核アメリカとの同盟を維持・強化しなければならないという。この考え方は、世間でも通用している。これと対抗するためには、非軍事の平和は可能であること、アメリカとの軍事同盟や核兵器への依存は、不要だけでなく、むしろ危険であることを理解してもらうことが必要。

この理解を求めらるうえでのヒントがこの「平野文書」での幣原の言葉に埋蔵されているように思う。幣原やマッカーサーに対する評価がいろいろある。私は、幣原と同時代を生きていた反戦と自由を求めていた群像が天皇制政府の下で受けた仕打ちを知っている。マッカーサーのような反共主義の偏狭さと非寛容が人類社会の滅亡をもたらすかもしれないと思っている。

けれども、彼らの言動の中に、私たちが継承するに値するものがあれば、それは吸収しようとも思う。核兵器も戦争もない世界の実現のためには、柔軟かつ大胆な思考と行動が求められていると思うからである。

「安全保障法制の廃止と立憲主義の回復を求める市民連合」が、九条の改定や自衛隊の海外派遣に反対し、核兵器禁止条約の即時批准を野党（維新を除く）に提案していることに注目したい。そこに「狂気の叫び」の現代風バージョンが見て取られるからである。

また、共産党を含む政権構想が検討されていることにも刮目している。この国にも根強く存在する反共意識を乗り越えて、何らかの形で共産党が政権にかかわることは、「核兵器も戦争もない世界」に向けての大きなステップとなるからである。

私たちの「素晴らしい狂気」を現実とするためには、核兵器を含む軍

事力に依存する「安全保障政策」の危険性を指摘するだけでなく、軍事力に依存しない「安全保障政策」の提示も求められることになる。それが、日本国憲法の地球平和憲章化である。

2020年10月14日